

友達以上の接方

「もうちょっとだけ……
一緒にいてもいいですか？」

Adult only

夜、ラウンジで

シエルと二人で
今日二日の任務の報告書をまとめていた。





「……はい、問題ありません」

「これにて本日の任務の報告書は
以上になります。
お疲れ様でした隊長」

「うん、
シエルの方も
お疲れ様。
シエルと一緒に
仕事も早く済んで
助かるよ」



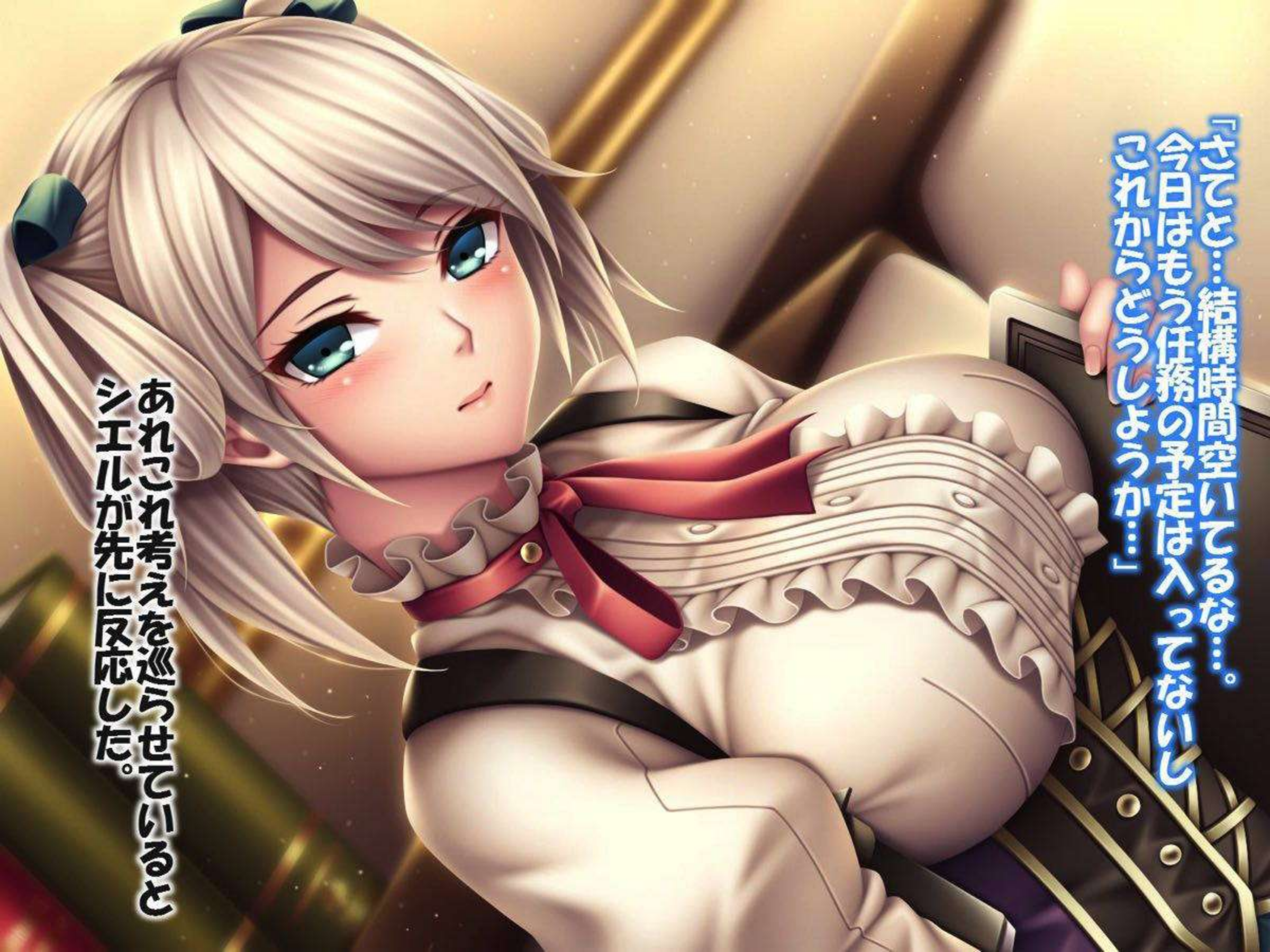


シエルが
微笑みかける。

「ふふ、
ありがとうございます」

「さてと…結構時間空いてるな…。
今日はもう任務の予定は入ってないし
これからどうしようか…」

あれこれ考えを巡らせていると
シエルが先に反応した。



「あっあのっ…隊長！」

「ん？
どうしたの？
シエル」

先ほどの様子とは異なり、顔を赤らめ
何やら落ち着きが無い様子のシエル。



「そ、その…もしよろしければ…
もうちょっとだけ…
一緒にいてもいいですか？」

緊張した面持ちの
シエル。

「シエル……」

「うん、いいよ。
俺もシエルと一緒に過ぐりたいって
思ってたし」

「ほ……」

「本当ですか……？」

「もちろん」





「あ……ありがとうございます……！」

シエルに笑顔が戻る。

「……
やこも……
嬉しいのです……」

嬉しそうに
微笑むシエル。

「どりあえず
ここに居続けるの
もなんだし、
部屋に行こうか」

「報告書も提出しないと
いけないしね」

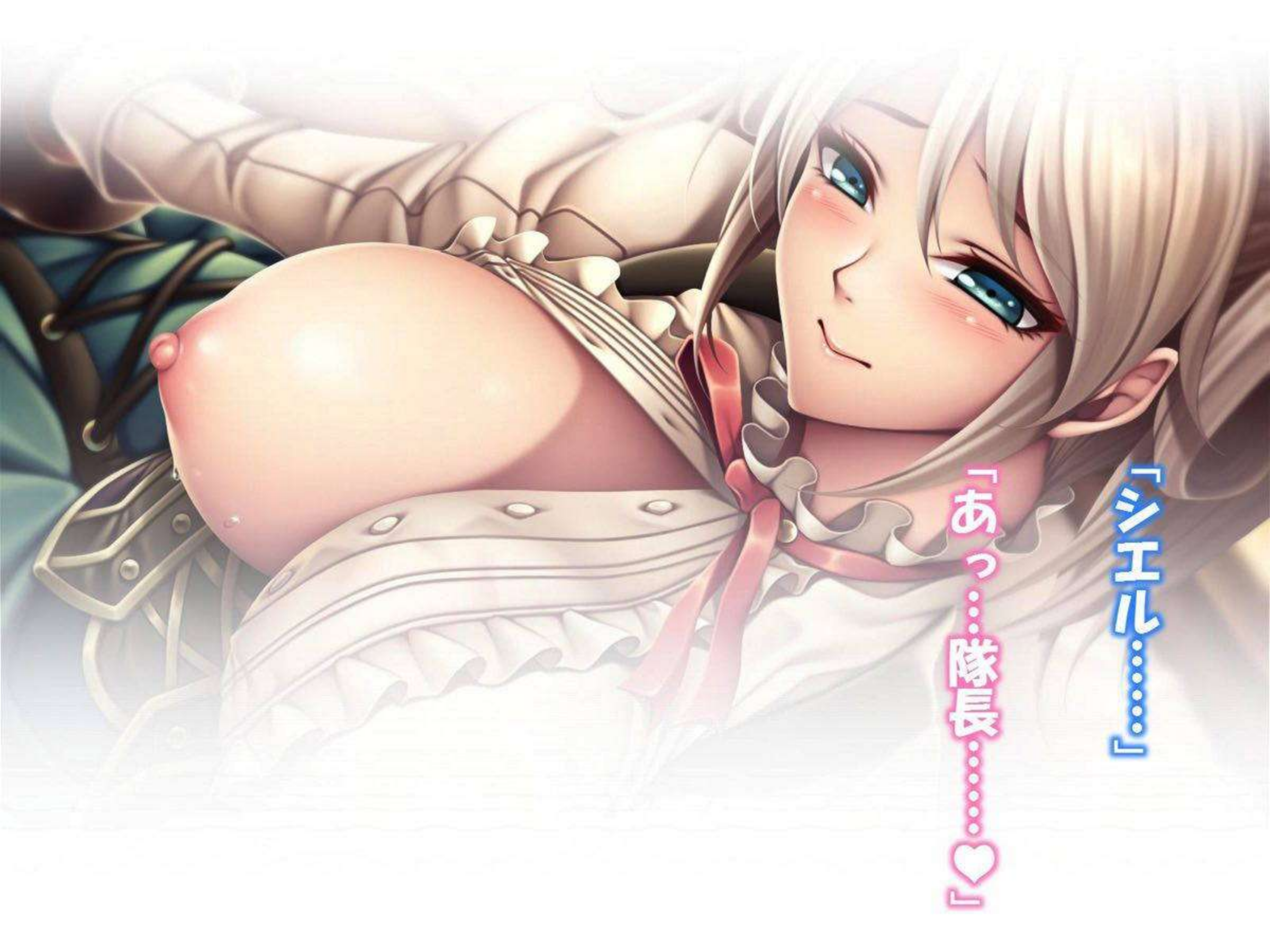




「はい♡」



ラウンジをあとにして
報告書を提出してから
シエルと二人で自室へと移動する。



「ムヒムヒ……」

「あっ……隊長……♡」

部屋に着くなり、ベッドに隣り合わせになるように腰掛け、おもむろにシエルのブラウスのボタンを外し、片方だけ乳房をさらけ出す。

「あっ……♡」

片方だけさらけ出されたシエルの乳房はとても豊満で、ほんのり汗ばんでいた。

「シエルのおっぱい、すごく……綺麗だね」

見事なまでの大きさに思わず見とれてしまっ。

「そ、そんな……
恥ずかしいです……隊長……」

緊張しているのか、
こわばった様子のシエル。
しかし、その表情は
うっすらと紅潮し、
かすかに興奮しているようだった。

「触っても……いい？」

若干、興奮気味の様子でシエルに許可を求める。

「はい……ぎゅぎゅ……♡
君の好きなように……♡
触ってください……♡」

「うっ……うん……
それじゃ……遠慮なく……」

鼓動が高鳴り、息も荒々しく、
シエルの胸へと手を伸ばす。

「……あっ……♡」

手の平でゆっくりと乳房全体を
持ち上げるようにすくい上げると、
シエルがかすかに甘い声をあげた。

「んっ……はあ……♡
隊長……♡」

徐々に息遣いが荒くなるシエル。

「シエル？大丈夫？痛くない？」

「はい……んっ……♡
はぁ……大丈夫……です……♡
それよりもなんだか……
変な気分です……♡
頭がふわふわするとううか……
君に触られて……んっ♡
とても不思議な気分です……♡」

艶かしい反応を示すシエル。
熱心な乳房への愛撫に
感じてきているのか、
手の平の中で徐々に乳首が
硬くなっていくのがわかる。

柔らかい乳房の感触が手の平全体を包み込む中で、
勃起した乳首の感触が合わさり、
非常に揉み心地の良い感触が手の平に伝わってくる。

「シエルも感じてるんだね…
可愛いよ、シエル……」

「そんな…そんな事言われたら…
あっ♡ますます…んっ…はぁ…♡
変な気分になってしまいます…♡」

互いに興奮が高まる中、
愛撫する方の手にも熱が加わり、
シエルも時折
それに反応するかの様に
身体をひくつかせる。

「ねえ、シエル。
もう少し…強く触っても大丈夫？」

「えっ、はっはい…大丈夫…です…
ぜひ遠慮なく…触ってください…♡」

「んあ……あっ……♡……あんっ……♡」

「す、すごい……
指が埋まる様な柔らかさだ……
はあ……はあ……シエル……」

「だ、隊長……あっ♡」

「シエル……シエル……」

お互いの名前をささやき合いながら、
ひたすら乳房への愛撫を続ける。

「あっあの…隊長…
出来れば…んっ…
もう少し…あっんっ…
優しく…♡」

「はあっ…はあ…はあ…はあ…」

シエルの願いも虚しく、
乳房への愛撫に没頭し続け、
声も耳を通らない。
無意識のうち自然と揉む力も強くなっている様で、
その刺激にシエルが僅かながらに身体をよがらせる。

「んうっ……あっ……はあ……んくっ……♡
はあ……はあっ……あっ♡♡♡」

軽い絶頂に達したのか、シエルがびくびくと身悶えする。しかし、無我夢中に愛撫は続けられ、シエルは更なる快樂へと誘われる。

「はあ……シエル……
はあ……はあ……」

意識は先ほどからシエルの乳房にのみ向けられており、シエルの様子とはお構いなしにひたすら刺激が加えられる。

「あぁっ……♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

再び絶頂に達するゾクゾク。
甘い嬌声が室内に響き、その声でちんちんが我に返る。



「シ、シエル……？
どうめん……つい夢中になりすぎた……」

「はあっ……はあ……はあ……はあ……」

んっ……だ、大丈夫です……
その……す、少し……」

「もしかして……
イっちゃった……？」

「……は、はい……」

そ、その……
軽く……ですが……♡」

すっかり興奮し呼吸も荒々しく、
身体も小刻みに震え、
かないうっとうりした様子のシエル。
表情も熱っぽく紅潮し、淫猥な様相を呈していた。

「おっぱいだけでイっちゃうなんて
シエルはエッチだね」

「そ、そんな事は……
君が……熱心に触られるので……
もう、君はいじわるです……!」

「そうだったね、ごめんごめん。
ねえ、シエル……!」

「はい、なんででしょうが」

おもむろに服を脱ぎだし、
勃起したペニスをシエルに見せつける。

「あっ……す、すごい……
もう、こんなに大きくなって……♡」

「シエルのおっぱい触ってたら
我慢できなくなっちゃって……
ねえ、シエルの手で……
すごいてごしいな……」

はちきれんばかりに怒張したペニスが
シエルの目の前で激しく脈打つ。

「わ、わかりました……
それでは……今度は私から、
君に気持ちよくな……頂きますね……♡
失礼します隊長……♡」

そう言ってシエルは腰を上げ、
ペニスの方へと手を伸ばした。

互いに唇を貪り合う中で、
シエルがおもむろに
ペニスをしごき始める。
その動作はぎこちないものの、
シエルの柔らかい手の感触が
非常に心地良い感触をもたらす。

「んんっ……んちゅっ……」

ちゅぷ……んはあ……」

た、隊長……♡♡「

「ちゅるっ……んむっ……」

ちゅぱ……はあ……はあ……シエル……」

「んちゅ……はぁ……

お加減はいかがですか？隊長……♡」

「うん……スゴくっ……良いよ……シエル……
シエルの手、柔らかくて……気持ちいい……
このまま続けて……」

「はい……♡♡♡

んん……♡

んちゅ……♡

ちゅぷ……♡

んっ……♡♡♡♡」

再び唇を重ね、
手淫を続行するシエル。
手の平で亀頭全体を
撫でる様に動かし、
指は一本一本
カリや裏筋を優しく刺激する。
その度にペニスが
ドクンと脈打ち、反応する。

「んっ……あっ……♡
君のおちんちん……ヤケドしそうな位……
熱く……なってますね……♡
それに……スゴく、硬くて……あっ……♡♡♡」

ペニスをしごく度、
徐々にシエルの息が荒くなる。
先の方による興奮は
若干落ち着いてたものの、
どうやらしごいているうちに
改めて興奮が
高まってきているようだった。

「ねえ、シエル……
もっと……
もっと強く
しごいて……」

「は、はい……
こ、こうですか……？」

シエルが上下に手を
動かし始める。
手で輪っかを作り、
ペニスの形に沿って
握りの強弱をつけていく。



緩やかなストロークに対し、
敏感な反応を示すペニス。
びくびくと脈打つ反応に
シエルが驚きの声を上げる。

「あっ……んっ……♡♡♡
はあ……はあ……す、すごい……
手の中でまた一段と大きく……
んっ♡♡♡」

「はあ……はあ……
じよ、上手だよ……シエル……
すごく……気持ちいい……
あうっ……んくっ……」

シエルの手淫に対して
段々と余裕を無くして、
徐々に声が漏れてくる。



「その…シエルの…
下着を使って…
しごいてほしいな…って…」

「ねえ、シエル…
一つだけ…お願いしたい事が
あるんだけど…」

「はい、なんででしょうか…」

「えっ……あ、あの……
そ、それは……」

突然の破廉恥な要求に対し、
困惑するシエル。少
しだけ沈黙した後
にシエルが再び口
を開く。

「わ、わかりました……
君が……そう、
望まれるのでしたら……」





「んっ…失礼します…
隊長…♡♡」

そう言っ
てシエル
はおもむ
ろに下着
を脱ぎだ
し、脱い
だばかり
の下着を
勃起した
ペニスに
覆い被せ
る様にあ
てがった。

先ほどまで穿いていたシエルの下着は十分な温もりがあり、クロッチ部分には愛液による染みができていた。

「おお……お……うくっ……」

はあ……はあ……シエルの下着……あったかくて……気持ちいい……」

シエルの下着の感触に、思わず情けない声が漏れてしまう。

「は、恥ずかしいので……あ、あまり……コメントは……控えてください……」

シエルが恥ずかしそうに目を背ける。しかしながら怒張したペニスにあてがわれたシエルの下着の温もりと感触の前では、そう容易く興奮は抑えきれず、逆にますます昂る一方だった。

「シエルの下着……染みが付いてる……」

目ざとく見つけるとシエルが顔を赤らめる。

「うっこれは…その……」

「もしかして…
さっき、イったとき……」

「…は、はい……」

シエルが素直に頷く。
先の愛撫により、
シエルの秘部は
十分に濡れており、
膣口から溢れ出る愛液が
太ももを伝う様に
垂れていた。

「…もう…あれほど恥ずかしいと
言ったのに……いじわるです…隊長……」

「ごめんね、シエル…
ほら、舌…出して……」

「んあっ…はあ……」

あっ……隊長……
んむ…んちゅ……♡♡

再び唇を重ね合わせる。
互いに舌を舐める様に
絡み合わせ、
濃密なまでに貪り合う。

「ちゅ…ちゅるっ…ちゅぽっ…
はあっ…いいよっ…シエル…
その調子…そのまま続けて…」

キスを交わしながらも、
シエルの右手は相変わらず
ペニスをしごき続けている。

「隊長…
ちゅっ…んちゅ…
ちゅる…」

んむ…♡♡

「はあ…はあ…はあっ…
シエルの…柔らかい手と…
下着の感触が…すごくっ…
気持ちいいよっ…」

先程まで穿いていたシエルの下着、
そう考えたただけで頭の中は
興奮で一杯になり、
ペニスもより一層怒張する。
時折、切なそうにびくびくと
脈打つ反応にシエルが
驚きと同時に
甘い声をあげた。

「あっ♡…
隊長のおちんちん…
また…
びくびくっ…♡♡」

射精の波が近いのか、
徐々に身体が小刻みに
震えだす。
ペニスの方も大量の
カウパー汁がシエルの
手淫によって溢れ出し、
上下に動かす度、
全体に塗いたくられ、
くちゅくちゅと
淫猥な音を響かせている。

「はぁ…はぁ…

シエル…そろそろ…イキよ…」

「んっ…はぁ…

いい…ですよ…

このまま…遠慮なく…

存分に射精

してください…♡♡」

耳元で甘く囁くシエルに
脳が痺れる様な感覚を
覚えるのと共にやがて
我慢の限界を迎える。

怒涛の射精の勢いに
激しく身悶えする。
大量に放出された精液は
シエルの下着を
容赦なく汚し、
その周りにも
飛び散っていく。

「びゅっ……びゅっ……あっ……」
「ぶっ……はあっ……」

びゅっ……びゅっ……あっ……
びゅっ……びゅっ……あっ……



「んっ……♡あぁっ……♡♡♡♡♡
…はぁ…すごい…
沢山…出て…ますね…
んふっ…♡♡♡

想像以上に激しい射精に
シエルも思わず驚き、
軽く身体をひくつかせる。

「っ……あっ……はぁ……
まだ…収まらないっ……！
うっっ……」

どくどくと未だ収まらない射精に
身体の痙攣も止まらない。
気持ちよさそうにしている
様子をシエルも息を荒くし、
興奮した状態でまじまじと
見つめていた。
しばらくしたところ、
ようやく射精が収まり、
互いに息を整える。



「はあ…はあ…はあ…
ふふ、すごい勢いでしたね…♡」

「そ…そうだね…ハハ…
自分でもビックリしたよ…
はあ…はあ…ふう…」

「それにしても…
あれだけ大量に射精されたのに…
まだ…こんなに硬い…なんて♡」

ペニスを握ったままシエルが
うっといとした様子で見つめる。
大量に射精したにもかかわらず、
未だにヤケドしそうな位、
熱を込めたペニスは
射精前と遜色ない
硬さを保っていた。

ストリートな要求に
シエルが顔を赤らめる。
しかし、シエルも既に
我慢の限界に達していたようで、
すんなりと要求を受け入れた。

「わ、わかりました……♡
そ、その……私も……先程から
下腹部の辺りが……♡
な、なんだか切なくて……♡
君の……おちんちんで……♡
き、気持ち良くして……♡
頂きますか……？♡♡♡」

「一回出しただけじゃ
まだまだ足りないよ……
それよりも次は……
シエルのおまんこで……
気持ち良くなりたいな……」

「っ……♡♡♡」

「シエル……」

シエル自らの
羞恥的な要求に、
真っ先にペニスが
反応を示し
ドクンと大きく
脈打った。

先程射精したばかりの
ペニスが既に
回復しきった様な
全開ぶりをを見せており、
シエルの手の中で
今にも暴れるかの様に
激しく脈打ち、
怒張っていた。

「あっ♡♡…た、隊長……？」

「ごめん、まさかシエルの方から
エッチなお願いされるとは
思ってもみなかったから……
ますます興奮しちゃって……」



「はあ…はあ…ムヒムヒ…」

「隊長…♡♡♡」

シエルをベッドに優しく寝かせ、
おもむろに両足を開いてみせる。

「あっ♡♡♡」

おおっぴらに開かれた下半身には
今にも雄を欲しているかのよう
ヒクヒクと切なく口を開き、今か今かと
挿入を待ちわびているシエルの性器があった。
その腫口からはすでに大量の愛液が溢れ出してあり、
めらめらと淫らに光を反射させていた。

「はあ……はあ……シエルのおまんこ……
すごく……綺麗だよ……」

「は、恥ずかしいです……隊長……♡
あ、あまり……見つめないでください……♡♡」

しかし、すでに目線の方はシエルの秘部に
釘付けされており、ペニスも待ちきれんばかりにと
激しくいきり立っていた。
挿入する前にペニスの先をあてがうと
物欲しそうに亀頭に吸い付き、
さらに上下に擦るとクチュクチュと淫猥な水音を響かせた。

「やあっ…あっ…んっ…♡♡♡
た、隊長…♡はあっ…はあ…」

「すごい…シエルのおまんこ…
先っほ当てただけでこんなに…いやっぐっ…
吸い付いてくるなんて…はあっ…はあ…」

ぐっ…めっ…じゅっ…じゅっ…

劣情を掻き立てられる様な光景を前にし、
今すぐにでも挿入したい気持ち在必死に抑え、
ゆっくいと外側の感触を味わうかのように
互いの性器を擦り合わせる。

「あっ……んっ……♡♡♡
隊長……じ、焦らなごでください……♡♡♡♡♡」

艶を帯びた声で訴えかけるシエル。我慢しきれないのか、性器を擦り合わせていると身をよじり、自ら挿入をせがんでくる。しかし、それを上手く手を使ってペニスを動かさず、ギリギリ入らないように躲けてみせる。

「もうちょっと……もうちょっとだけ……
はあはあ……シエルのおまんこのヒダ、
擦れる度……気持ちいい……」

「んっ……ああっ……♡
……もう……いじわるしないでください……隊長……」

我慢の限界といった様子か、シエルが潤んだ瞳で訴えかける。

「ごめんねシエル……それじゃあ……そろそろ……
シエルのおまんこの中に……入れるね……」

「はい……♡♡♡……きゅん♡♡♡……隊長……♡♡♡」

散々焦らした後、ようやく挿入しようとペニスの先を
シエルの膣口に向けてそっとあてがう。
性器同士が触れた途端、シエルがかすかに甘い声をあげた。
そしてゆっくりと腰を前に下ろす……

「んっ……♡あぁっ……♡♡♡♡♡」

「んっ……ぐっ……ぐっ……んっ……んっ……」

ゆっくりと腰を前に進め、シエルの肉壺にペニスを埋めていく。ねっとなとしたヒダの感触が亀頭の先からびっちりと隙間なく埋まってゆき、段々ペニス全体を包み込んでゆく。

「はぁーっ……はぁーっ……ふっふっふっ……」

あまりの快楽に腰が抜けそうな勢いを必死に抑え、
その場で思わず固まってしまう。

「はっ……はっ……はぁ……た、隊長……♡
あっ……♡♡」

シエルもまた、膣内に収まったペニスの鼓動を
鋭敏に感じ取り、びくびくと身体を身悶えさせていた。
その度に膣が断続的に締められ、
絶頂を必死に抑えているペニスに刺激を加える。

「あっ……くっ……ズヘル……今……ぞ、そんなに……締め付けられると……くっくっくっ……くっくっ……」

「んっ……あっ……はあ……はあ……ふふ……気持ち……いいですか……隊長……♡」

「……うん……はあはあ……油断してるぞ……出そう……んあっ……くっ……ごめんズヘル……もう……ちょっとだけ……このまま……いさせて……」

「はい……♡わ、私も……君と……繋がっているぞ……なんだか……おかしくないぞうで……あっ♡……はあ……♡♡♡」

互いに余裕の無い状態で少しの間、膠着する。
結合部の温もりを一身に感じることによって、
非常に満たされた気分になる。

「はあ……はあ……シエル……」

「隊長……♡♡♡♡」

「シエルのおまんこで……捕食……されちゃったね……」

「はい……♡♡君の……おちんちん……
食べちゃいました……♡♡♡♡」

このままずっとこうしていたい、そんな幸福感に包まれながら
互いに全身で快楽を受け止める。
やがて、ひとしきり挿入時の快楽の余韻に浸った後、
息を整え、改めて腰を動かし始める。

「それじゃあ…そろそろ…動くね、シエル…」

「んっ…は、はい…あっ…」

おもむろに腰を動かし始める。まずはペニス全体で周りの粘膜の感触を堪能するかの様に、ゆったりとしたストロークで出し入れする。緩やかなピストンにシエルもわずかばかり身体を反応させ、軽く身をよじらせる。

「シエル？大丈夫？苦しくない？」

「…は、はい…♡♡問題ありません…君が…優しく接してくれているので…なんだか…とても…心地良い感じですよ…♡」

「そっか、良かった…シエルの中も…すっごく気持ちいいよ…」

「隊長…♡♡♡」

シエルの膣内はまるでペニスの形を覚えようとしているかの様に、
全体に絡みついて優しく締め付けてくる。
非常に心地の良い感触に愛おしささえも感じ、
興奮のあまり膣内でペニスがとんとん膨らんでいく。

「あっ……♡隊長の……おちんちん……
な、中で大きく……んっ♡それに……びびびび……
激しく動いて……ああっ……♡♡♡♡」

「はぁ……はぁ……シエルの中……ずじにぬるぬる……
それにあっただかくて……はぁ……うっく……」

ゆったりとしたリスムで腰を動かしているのにもかかわらず、
その快感はまるで激しさの一途を辿るばかりだった。
やがて自然と腰の動きも激しくなり、
お互いにひたすら快楽を貪り合っていく。

「あぁっ……シエルっ……それ……いい……
シエルのおまんこが……いやらしく……吸い付いて……
くっ……うっ……」

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……だ、隊長……隊長……♡♡」

「シエル……シエル……♡♡」

互いの名前を囁き合いながら一心不乱に腰を動かす。
脳が痺れる程の快楽に、理性を保つのがままならず、
ただひたすらに互いの身体を求め合い、愛を育んでいく。

「あんっ……♡♡♡はぁ……た、隊長……

は、激しいっ……です……んあっ……はぁっ……♡♡♡

「はぁっ……はぁっ……ごめんシエル……

気持ちよすぎでっ……腰……止まらないっ……あっ……！」

先程からピストンの勢いは衰えず、結合部からは互いの体液が混ざり合い、いやらしい音を立てていた。また、膣内の激しい動きにシエルが段々と快感を頭にし、激しく身悶えする様子も度々伺えた。



「はっ…はあっ…はあ…シエル…そろそろっ…
うっ…！そろそろ…イキそう…はあっ…」

「は、はい…わ、私も…先程から…
中の…様子が…おかしくって…
んああっ…♡♡♡」

「はあはあ…シエル…このまま…シエルの中に…
濃い精液…出すよっ…はあっ…はあ…」

「は、はい…♡♡お、思う…存分…
出してっ…ください…あああっ…♡♡♡」

膣内でペニスが膨らむ気配を感じ、シエルが一層強く
膣を締め付けてくる。まさに搾り取ろうといった様子で
締め付けてくる膣内に対し、ペニスも肉壁を掻き分け、
射精に臨もうと激しく脈打ち、暴れまわる。

「はあはあっ……！<…うっ…うっ…！
出るっ……！はあっ……！」

びゅーっ！びゅーっ！びゅーっ！びゅーっ！びゅーっ！びゅーっ！

「んあっ……ああっ……はあっ……
ああっ……んっ……♡♡♡」

シエルの膣内で激しく脈動するペニスから、ゼリー状の様な塊を帯びた白濁液が大量に迸る。その勢いを膣内で受け止めることによって、シエルもまた激しく身悶えし、頭が真っ白になりそうな感覚と共に、幸福に包まれた様な気分になる。



「はあっ…はあっ…隊長の精液…まだ…出て…
ああっ♡♡」

「はあーっ…はあーっ…し、射精…止まらないうっ…
くあっ…ううっ…!」

ドクドクと容赦なくシエルの膣内に精液が注がれる。
強烈な射精感に体は激しく痙攣し、脳もまた痺れる様な感覚に
陥ると共に、全身で快楽を受け止める。
シエルもまた、その熱い進りに恍惚とした表情を浮かべ、
一身でその射精を受け止め、快感を噛み締める。



やがてひとしきり射精し終わったところで、一先ず落ち着きを
取り戻そうと互いに息を整える。しかしながら、
あれほど大量に射精したのにもかかわらず未だペニスは
衰える事なく、その大きさと硬さを保ちながら
シエルの膣内で静かに脈動していた。

「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…君の…おちんちん…
まだ…中で…あっ…♡
大きさを保っていますね…♡♡」

「不思議だね…はぁ…
あれだけ出したのにもかかわらず…
シエルのおまんこの中で包まれていると…
なんだか、衰える気が…しなくて…」

大量の精液で溢れかえり、ドロドロになった膣内で
繋がったまま、射影後の余韻に浸る。
中はゆるゆるとした感触で心地良い締め付けが
ペニスを優しくマッサージしていた。

「…ねえ、シエル……もっと……もっと……もっと……したいな……
シエルのおまんこで……もっと……もっと……気持ち良くなりたい……」

「隊長……♡……はい……♡
もっと……沢山……シマシマ……隊長……♡♡♡」

「うん……沢山……沢山シよう……シエル……♡」

抑えきれない興奮に互いが互いを求め合う。
シエルの身体を起ここした後、今度は体勢を変えて
今一度情事に耽る……。





「あっ……♡た、隊長……
こ、この体勢は……
す、少し……
恥ずかしい……です……♡♡」

「シエルの恥ずかしい姿なら……
何度も見てきたじゃないか……
それに……すっごくエロいよ……シエル……」

「ぞ、そんな……♡♡」

先程の仰向けだった体勢から、一旦シエルの身体を起こし、身体を反転させ、うつ伏せの状態にする。
そこから覆い被さる様に身体を乗せ、
両足でシエルの下半身を固定する。
完全に身動きを固定されたシエルの下半身は
無防備にお尻の穴や秘部を露出させ、
改めて切なく口を開いた肉壺にペニスを侵入させる。

「ああっ……♡♡♡んっ……
た、隊長……♡♡♡」

「うっ……はあっ……」

ああ……すごい……
シエルのおまんこ……
さっきよりも……強く……
締め付けてくるよ……
それに……お尻の穴も丸見えで……
すっごいエロい……はあ……はあ……」

「ああ……そ、そんな……♡♡♡
は、恥ずかしいです……隊長……♡♡♡」

「可愛いよ……シエル……それにまだ……
動いてもいないのに……んっ……
こんなに……締め付けて……
うっ……くっ！」

挿入したばかりで動いていないのにもかかわらず、シエルの膣内は先程から切なく締め付けてくる。体勢が変わり、体重が上から加わった事により、先程よりも強い刺激が与えられているようで、シエルからは身動きが出来ない為、継続的な軽い絶頂を迎えている様子だった。

「だ、隊長……♡♡♡その……その……早く……早く……動いて……ください……♡♡♡♡♡♡」
「あ……あ……あ……♡♡♡♡♡♡」
「あ……あ……あ……♡♡♡♡♡♡」

「シエルの中、さっきから軽くイキっぱなしだね……おまんこキュンキュン締め付けてきて……すごい……気持ちいい……♡♡♡♡♡♡」
「はあ……はあ……それじゃあ……遠慮なく……動くね……♡♡♡♡♡♡」

「はい……♡♡♡♡♡♡」

ゆっくりとペニスを引き戻してから、
勢いよく腰を落とす。
柔らかい膣内でゴリゴリと肉を掻き分ける
ペニスの感触にシエルが大きく身悶えした。

「ああああっ……♡♡♡♡」

ビクビクと
身体を痙攣させる
シエルに対し、
腰の動きは止まらず
どんどん
ストロークを
上げていく。

「はあっ……はあっ……シエル……
すごく……気持ちいいよっ……あっ……」

「んんっ……あっ……♡……た、隊長……」

ま……待って………くだ……ああっ♡♡

…も、もう少し……し……ゆ……ゆっく……

んあ あっ♡♡♡

激しいピストンに
シエルがますます悶える。
先程から膣内は狭くキツく
締め付けており、
ペニスをより一層刺激する。
その刺激にペニスもどんどん
膨らみ、
大きさは硬さを増していく。

「はあっ…はあっ…隊長…♡
…隊長の…お、おちんちんが…
ああっ…♡♡先程から…
気持ちいい…ところばかり…
責めて…はあっ…んんっ♡♡♡♡」

「ああ…んくっ…はあっ…!
ああ…シエルの…おまんこ…もっ…
すごい…気持ちいい…ところ…刺激して…ああっ！」

互いの性器が擦れ合う度、先程までの体位とは異なるせいか、受ける刺激もまた変わってくる様で互いが互いの敏感な部分を刺激し合う。その度に興奮の度合いもますます高まり、結合部からは先程射精した精液がどんどん掻き出され、中の精液もまた愛液と混ぜ、よりスルスルなピストンをおこなわせる。



「はあ……はあっ……ごごからだと……
繋がってるさごご……はっきり見えて……
すっごく……エロいよ……シエル……」

「ああ……そ、そんな……さごご……
見られては……んあっ……♡♡」

シエルが羞恥からか、ぎゅっと膣内を締め上げ、反応を示す。
お尻の穴もその度にヒクつかせ、かなり劣情をそとる様な
雰囲気醸し出していた。

「うっ……あぁっ……！
すごい……おまんこ……きゅうきゅう……締め付けてくるね……
もしかして……見られただけで興奮した……？」

「じ、知りませんっ……♡♡」

「はあ……はあ……ホント……
お尻の穴もヒクヒクして……
かなり……エロい……」

「っ……♡♡」

思わず見とれてしまう程に綺麗な
シエルのお尻に、
気がつけば片手が伸びていた。

「あっ……♡た、隊長……」

ぞ、そんなところ……」

触っては……ああんっ……♡♡♡♡

「はあ……はあ……」

シエルのお尻……」

柔らかくて……」

ハリがあって……」

気持ちいい……」

「はあ……あっ……♡」

た、隊長……んあっ……はっ……♡♡♡

お尻を揉みしただかれ、
シエルがますます身悶えする。
きめ細かい肌の感触に思わず夢中になり、
揉む手の動きも止まらず、
やがて段々とシエルが息を荒くする。

「ほら…シエル…お尻の穴…
丸見えだよ…
はあっ…はあっ…」

「やあ…た、隊長…
ひ、広げちゃ…
ああっ…
はあっ…んっ♡♡♡♡」

お尻の穴を拡げられ、
ますます顔を赤らめるシエル。
しかし、本人の反応とは裏腹に
身体は正直な反応を示し、
ペニスをより一層強く締め付ける。

「ああっ…うっ…シエルの…おまんこ…
もう…ずっと…締め付けっぱなし…だね…
ああっ…！」

「はうっ…ああ…♡♡
…もう…なんだか…
き、気持ち良くなりすぎて…
ああっ♡♡…頭の中が…
真っ白…です…♡♡♡♡」

「はあっ……はあっ……俺も……
さっきから……気持ちよくなって……
ああっ……腰……止まんないっ……
あうっ……んくっ……」

「はあんっ……はあっ……
だ、隊長……は、激し……
あああっ♡♡♡♡♡」

「はあっ……はあっ……はあっ……
うう……シエル……シエルっ……」

「だ……隊長……
あんっ……んんっ……♡♡♡♡♡」

とめどなく溢れる快樂に
身も心も心酔し、
ひたすらに肉欲を貪り合う。
猛々しくいきり立ったペニスは
今もなお、シエルの肉壺を
柔らかいヒター一枚一枚を
容赦なく抉り、
激しいピストンを繰り返す。



次第に限界も近くなっているようで、時折ペニスがびくびくと切なく脈動する。シエルの膣内もそれを鋭敏に感じ取っているのか、激しい締め付けで射精を促してくる。

「ああ……シエルっ……
そろそろ……イキそう……
かも……あっ……！」

「んっ……♡
ふふ……君の……おちんちん……
中で……びくびく……あっ♡♡
脈動……しているのが……
伝わって……きます……♡♡
はあっ……
精液……出したい……ですか……？」

「はあっ……うん……
出したい……シエルの……
おまんこの中で……
また……射精したいっ……
くっ……！」

「いんっ♡あっ…♡はあ…
いい…です…よ…
き、君の…好きな様に…
思う存分…んあっ…
出して…ください…♡♡♡」

「はあ…はあっ…シエルっ…!」

「ああっ…♡♡」

シエルの甘い声で射精を促され、
興奮はますますヒートアップする。
先程まで限界に近かったペニスが
再び怒張り、膣内で大きく膨らんでいく。

「ああっ♡♡♡ぞ、そんな……♡♡
た、隊長の……おちんちん……
んあっ♡♡♡
ま、また中で……大きく……
んっ♡♡♡♡♡

「な……なんだろう……はあっ……
シエルに……あんな事……
言ってもらったら……
ますます……興奮……しちゃって……
もっと……もっと
気持ち良くなろう……シエル……」

「あああっ♡♡♡た、隊長……♡♡♡」

再び怒張したペニスが
シエルの膣内を掻き乱す。
シエルも限界が近かったのか
激しい反応を見せ、
おもいきり身体をよじらせた。

「はあ……はあ……
あ、隊長……
あうっ……はあっ……♡♡」

「はっ……はっ……
シエル……シエル……
はあっ……はっ……」

ぬちゃっ……にちゅっ……にゅっ……
にゅっ……ぬちゃっ……にゅっ……

無我夢中にピストンを続ける。
しばらくの間、互いの
荒い息遣いだけが聞こえてくる。
それに加えてピストンを繰り返すたび、
溢れ出る精液や愛液などで結合部からは
いやらしい音が立てられていた。

「はっ…はっ…はっ…はっ…
シエル…今度こそ…
い、イキそう…
あっ…くっ…」

「はあっ…はあっ…はっ…
んっ♡…は、はい…
ど、どうぞ…
おもい…きり…
出して…ください…
んんっ…♡♡♡」

膣内で小刻みに震えるペニスに対し、
シエルも限界を感じ取っているのか、
執拗に中を締め付けて射精を促してくる。
しかしながら、
膣内を締め付けることによって
ペニスの力りの部分が
シエルの柔らかいヒダを
激しいピストンによって抉り、
シエルにも強い刺激が
襲いかかる。

射精の瞬間、
激しいピストンと
膣内の潤滑の
良さからか、
腰を引き戻した
拍子に勢いあまり、
ペニスがシエルの
膣内から派手に
飛び出した。
その為、膣内へ
射精される
はずだった精液は
激しい勢いと共に
シエルの衣服に
大量に放出される。

「あぁっ……んっ……」
「あぁっ……んっ……」
びゅんっ……びゅんっ……びゅんっ……びゅんっ……

「んんっ……あぁあぁっ……♡♡♡♡」

「はあっはあっ……はあっ……
うっ……はあっ……!」

「はあ……はあ……
ああ……隊長の……
精液が……あっ……♡」

勢いよく飛び出した
精液は、
ものの見事に
シエルの衣服に
降りかかっていた。
一方でシエルは
ペニスが
引き抜かれた時の
快感でびくびくと
身悶えさせていた。

「はあっ……ごめん……
シエル……洋服……
汚しちゃって……」

申し訳なさそうに謝ると
シエルが優しく微笑んだ。

「ふふ、気に入らないけど大丈夫、隊長……」
「それにしても……」
「すごい勢いでしたね……♡♡」

「はあ……」
「れ、連続だと……」
「さ、流石に……」
「ちよっと……」
「疲れたね……」
「身体中も汗で……」
「ベトベトだ……」

「そうですね……」
「帰投してからまだ……」
「シャワーも……」
「浴びてません……」
「でしたからね……」

ひとしきり
おこなわれた
激しい情事に、
お互いの身体は
汗や精液などで
かなり汚れていた。
次第に興奮も収まり、
落ち着きを取り戻してみると
部屋中、鼻を突くような
すえた臭いが
充満しているのに気がついた。

「とりあえず、
身体…洗おっか…」

「はい、
そうですね…♡」

先の行為で
汚れた衣服や寝具等を
まとめた後、
お互いの身体を洗う為、
場所は浴室へと移る。



浴室へと移った後、お互いに汚れた身体を洗い流してから、シエルがおもむろに背後から寄り添い、身体を密着させてきた。

「後ろから…失礼しますね…
隊長…♡」

「うん…うん…」

シエルが背後から手を伸ばす。伸ばした手の先には、先程までの行為で疲弊したのか、萎縮したペニスがあった。

「……ああ……」

シエルが優しくペニスに手を触れると、緊張からか咄嗟に息が漏れ、ペニスがびくんとわずかに反応した。

「お加減は……いかがですか？
隊長……♡」


「う、うん……
すごく良いよ……」

シエル……
そのまま……続けて……」

「はい……♡♡」

シエルが優しい手つきで萎縮したペニスを、ゆっくりとマッサージする様にしごき始める。





「それにしても……
不思議な……感触ですね……
先程まであれほど硬く……
大きかったものが……
こんなになんらかくなるなんて……
それになんだか触っている……
つい……愛おしくて……
夢中になっちゃいますね……」

興味津々な様子でシエルが触り続ける。
射精を促す様な激しい手つきとは異なり、
萎縮したペニスを扱うかの様に、
優しく指で包んでマッサージする。
その手つきが非常に心地よくて、
段々とペニスも
反応を示すようになってくる。

「あっ……♡お、おちんちん……が……
びくびく……♡♡♡」

「シエルが熱心に触るから……
段々……感じてきちゃったよ……」

「そ、そんな……♡♡
か、身体を……洗うだけじゃ……♡」

「一緒に身体を洗うってなった時点で、
洗うだけじゃ済まないのは……
シエルも、予想できたのよね？」

「そ、それは……♡」

シエルが顔を赤らめる。身体を洗うだけ、
それだけでは済まない事は無論、
シエルにも安易に予想は出来ていた。

その証拠に、シエル自身も
この先の行為を期待して
興奮しているのか、

乳房の柔らかい
感触の中に一点、

小さな突起の部分が

硬くなってきており、

背中を通して伝わっていた。

「ねっ…シエル…だからこのまま…
このまま続けて…気持ち良くなっ…」

「わ、わかりました…♡
…それでは…このまま…
続けますね…♡♡」

先程まで優しく握られていた
ペニスは、シエルの手によって
次第に刺激を与えられるように
しごかれていく。

「ああ…シエルの手…
小さくて…柔らかくて…
すごく…気持ちいいよ…」

「あっ…♡
な、なんだか…
先程よりも…
硬く…なって
きてるような…」



「う、うん……段々……
気持ち良く……なってきたよ……
あっ……」

徐々にペニスもびくびくと反応を見せ始め、
ゆっくりと硬く、大きく膨らんでいく。

「ああ……
すごい……
また……段々……
大きく……
なっ……
あっ♡♡♡」

シエルの手の中で、ペニスが大きく脈動する。
やがてシエルの手淫の甲斐もあり、
ペニスは前と同じかそれ以上の
大きさと硬さを取り戻していた。



「んっ……はぁ……
ふふ、結局……こんなに……
大きくさせちゃうんですね……♡♡♡」

「まだまだ……
シエルとは……
気持ち良く……
なりたいから……
シエルはもう……
満足しちゃった……？」

「……いえ、私も……まだ……
君と……沢山……
まぐわいしたいです……♡♡♡」

そう言ってシエルは
さらに身体を密着させ、
ゆっくりとペニスを
上下にしながらみせた。
優しい手つきの中には、
相手を気持ちよくしたい
という真心が
込められており、
その気持ちに
ペニスを通して
身体全体に
快感が行き渡る。

「んっ……ああ……
シエルのおっぱいが……
背中当たって……すごく……
ドキドキする……シエルも……
チンポ触って……興奮した……？
乳首が硬くなってるのが……
伝わってくるよ……」

「そ……そんな事は……
あっ……♡
はあ……はあ……」

無意識からなのか、先程から
シエルが手淫をおこなっているのと
同時に身体をやたらとこすりつける
ような動作で密着してくる。
その度にシエルのしっとりとした
豊満な乳房が背中を
上下に移動し、
その感触に背中を通し、
全身に電流が
走る様な形で
快感が迸る。



ぬちゅ…ぬちゅ…いぢゅ…いぢゅ…

「はあ…はあ…隊長の…
おちんちんから…ざんざん…
エッチな…お汁が…
はあ…♡♡」

「はあ…はあ…
はあ…
シエル…
その…調子…
うっ…はあ、
すっごく…
気持ちいい…ちゅ…
はあ…はあ…」

しばらく続けているうちに
ペニスから溢れ出るカウパーが
シエルの手に混ざり、
手を上下に動かすことによって
淫猥な水音が立てられる。
ペニスの様子を察したシエルも
次第に興奮が高まっている様子で、
息遣いも荒くなってきた。



「んっ…はあ……
ふふ、君のおちんちん……
どんどん熱く……
なっ…って…いますね……
手が…ヤケド…しそぐぐぢぢ……♡♡♡」

「うっ…
き、気持ち…
よすぎて…
段々…頭が…
ポーッと…しこきたよ…
はあ…はあ…ああ……
シエル……」

「隊長……♡」

互いの名前を呼び合い、
ひたすら行進しては頭をぬぐう。
シエルの手淫をみっつて
切なく確々ぬぐう。スニスは、
今にも射精したような
様子で、亀頭からは
とめどなくカウパーが
溢れ出す。また、スニスの
熱にあぐらされたのかシエルの
顔もとんとん紅潮し、
身体をまますます動かして寝落ちた。
自らも少し持ち堪えなくなりたてに、おぼから
乳房を擦らいつけてくる。

「はあ……はあ……
隊長……隊長……♡♡」

ポテイソーフの
ぬるぬるとした
なめらかさが加わった
シエルの肌は、
しっかりとしていて
柔らかく、きめ細かい
肌がまさに極上のスポンジの様な
働きを示しており、
背中越しから伝わることによって
ペニスにも興奮が加えられ、
ますます怒張していく一方だった。

「ああっ……くっ……
はあっ……はあっ……ヅヒヒ……
いいよ……もっど……
もっと強く……
しごいて……
あう……んくっ……」

「は、はい……♡♡♡」



「はあはあ……ううっ……
シエル……！ああっ……はあっ……！」

「ああ……隊長の……
おちんちん……
手の中で……膨らんで……
んっ……ああっ……♡♡」

限界が近づいているのか、
はちきれんばかりに怒張した
ペニスが激しく脈動し、
シエルの手の中で暴れまわる。
今にも射精しそうな勢いのペニスに、
シエル自身も手を通して興奮が伝わり、
ペニスをしごきながら甘い声が度々漏れる。



「シエル……はあ……はあ……
そろそろ……精子……出そう……
ううっ……あっ……」

「はい……♡
あっ……はあ……
ふう……
いい……ですよ……
存分に……出して……
ください……
隊長……♡♡♡」

背後からシエルが耳元で
射精を促すよう甘く囁く。
劣情をそとる様な甘い声と
息遣いに脳が痺れる様な
感覚を覚えるのと同時に、
下腹部のペニスも一段と
激しく怒張する。



「ああ……すたい……くんない……
沢山……ああっ……♡♡♡♡」

シエルの手の中で
どくどくとペニスが
精液を放出する。
躍動感に満ちた
ペニスを握りながら
シエルは恍惚とした
表情で激しい射精を
見つめていた。

「ああっ……はあっ……
射精……止まらないっ……
うっ……くっ……」

シエルに寄り添われながらびくびくと身体を震わせ、
射精の快感を堪能する。ペニスだけではなく、
身体全体が快感に包まれ、非常に幸福に満ちた気分になる。

ひとしきり射精を終えたところで互いに息を整える。大量に放出された精液はどろりとした塊を帯び、ペニスから垂れ下がっていたり、シエルの手を伝い、滴っていた。

「はあ…はあ…
隊長の精液…
すごいでしょ…濃い塊…
すごいでしょ…それに…
暖かいです…」
♡

「はあっ…はあっ…はあ…
シエルの手が…柔らかくて…
気持ちよかったから…
こんなに沢山出たよ…」

「本当に……すごい量……ですわ……
でも……まだまだ……満足は……
していない様子ですわ……♡♡♡」

射精してもなお、
ペニスの大きさを
硬さは変わっては
いなかった。それを
手で感じとった
シエルもほのかに
次のまぐわいを
期待して、興奮で
胸を躍らせる。

「もちろん、だってまだ……
シエルの事も……気持ち良くさせて……
あげられてないからわ……」

「隊長……♡♡♡」

「まだまだ今夜は……
休ませないよ……シエル……♡」

「はい……♡」

「それじゃあ……今度は……
シエルも一緒に、
気持ち良くなろう……」

身体を反転させてシエルと向き合う。
そしておもむろにシエルを抱き寄せ、
勃起したペニスをシエルの
股下へと潜らせた……。

「あっ……♡隊長……」

「はぁ…はぁ……シエル……」♡」

「あっ…♡た、隊長の…
おちんちんが…♡♡♡」

シエルを優しく抱き寄せ、股下に
ペニスを潜り込ませる。両足の
ふとももに挟まれたペニスは
射精したばかりにもかかわらず、
未だに激しく脈動し、
いきり立っていた。
その激しい脈打ちっぷりに
シエルも思わず固唾を飲む。



「っ…はあ…ふう…
背中越しでも感じてたけど…
やっぱり…シエルの身体は
柔らかくて…
気持ちがいいな…」

互いの息が顔にかかる位、
近く密着する。シエルの
きめ細かい柔肌はシャワーの
水滴やボディソープの残り
などでしっとりとなめらかで
身体を擦り合わせる度に、
心地良い感触がした。
そして、形が崩れる程までに
押し付けられた豊満な
乳房からはコリコリとした
乳首の感触とわずかに
シエルの胸の鼓動が
伝わっていた。

「はあぁ…隊長の…
おちんちん…
こんなに…熱く…
あっ…♡」

シエルの股下の中でペニスが
ぴくんと小さく跳ねる。



「ふふ、君の…おちんちん…
まだまだ…
元気、一杯ですね…
♡」

「シエルとこうして
密着してるだけで…
みるみる元気に
なっちゃおうよ…」

「隊長…♡♡」

「それじゃあ…ふっ…
動くからね…」

「はい…♡」

おもむろに腰を前後し、
ペニスを動かして始める。
下腹部の割れ目に沿って
ペニス移動する度、
カリがシエルの秘部に
擦りつけられ、微妙な刺激が
シエルを感じさせる。



「んっ……あっ……♡」

シエルの口から微かに甘い嬌声が漏れる。軽度な刺激が逆に感覚を鋭敏にさせている様で、ペニスが擦れる度、わずかに身をよじらせた。

「……これ……シエルのふとももに挟まれているのも……気持ち……いいけど……上のおまんこにも……擦れて……うっ……すごく……気持ちいいよ……」

「はあ……んっ……♡♡」

シエルも同様に感じているのか、時折ぎゅっつとふとももを挟んでくる。

「はあっ……んっ……ああっ……♡
た、隊長……♡」

ゆるやかな動作での刺激に対し、
徐々にシエルからは激しい
興奮を感じられた。
身体をギュッと寄せ、
ペニスからの刺激に
グッと堪えている様子だ。

「シエル？…気持ちいい…？」



「は、はい……♡な、なんだか…
変な……気分……です……
ゆったりとした……
動作にも……かかわらず……
先程から……擦れる度に……
あっ……強い……
刺激が……んっ……♡」

「俺も……シエルの
おまんこ……擦れる度、
すぐ……興奮して……
頭の中……どうにか……
ないそうだよ……
はあっ……」

ゆるやかなストロークで
刺激されたペニスは
みるみるうちに大きくなり、
ものすごい熱を発していた。

「ねえ……シエル……
こっちに顔向け……
舌、出して……」

「は、はい……♡隊長……
あむ……んっ……ちゅっ……
んむ……♡♡」

シエルと唇を重ねる。
互いの舌を貪る様に、
ねっとりとした動きで
舌を絡み合わせる。

「ちゅっ…んちゅ…
にゅちゅ…はぁ…
シエル…♡」

「んっ…むちゅ…
にゅちゅ…んちゅっ…
はぁ…隊長…♡」

互いに身を寄せ、
下腹部では
シエルが健気に
ペニスを愛撫し、
唇同士では舌を貪る様に
キスを交わしていく。
自然と興奮も高まる中、
ペニスがさらに一段と
大きく脈動する。

「ああっ……♡た、隊長の……
おちんちん……すごい……
激しく……暴れまわって……
ます……♡♡」

「はあっ……はあっ……

シエル……

シエル……♡♡♡

「はああ……

隊長……♡♡♡」

互いの名前を囁き合いながら、
ひたすら腰を動かす。
キスを交わしたことにより、
ますます興奮が高められ、
腰の動きもわずかばかり
速くなっていた。





「はあっ…はあ…
ああっ…シエル…！」

「んっ…♡あっ…
だ、隊長…♡♡」

興奮からか、気がつけば
シエルのお尻に手が
伸びていた。両手で
シエルのお尻を驚掴みに
するとシエルが驚いた
声を上げた。

「ああ……シエルのお尻……
柔らかくて……
すべすべして……
はあっ……はあ……」

「だ、隊長……
そ、そんなに……強く……
触っては……
ああんっ……♡♡
はあ……はあ……」

シエルが快感のあまり、
甘い嬌声を上げる。しっとり
濡れていてきめ細かい
シエルのお尻は、豊満な乳房の
感触にも負けない絶妙な
柔らかさがあった。
両手で揉みたくうちに、
徐々にその感触に夢中になり、
思わず熱心に
揉み続けてしまう。



「あっ……んっ……ああ……♡
はあ……はあ……た、隊長……
そ、そんな……熱心に……
触られては……はあ……
んっ……♡♡」

「ご、ごめん……
あまりの柔らかさに……
つい……夢中に
なっちゃって……」

「そ、そんなに……
良かった……
ですか……？」

「うん……夢中に
なるほど……ね……」

「な、なんだか……
恥ずかしいです……♡」

「可愛いよ……シエル……
ほら、顔向けて……」
「た、隊長……♡♡」

「んんっ……んちゅ……にゅちゅ……
ちゅぷ……はぁ……
隊長……♡♡」

再び濃厚なキスを交わす。
キスを交わしている間にも、
お尻への愛撫や
ペニスによるシエルの
秘部への刺激は止まらず、
舌を絡みつかせながら
激しい息遣いが漏れる。

「……っはぁ……！
シエル……んちゅ……
ちゅぱ……
はぁっ……はぁ……」



「あっ……♡
隊長の……おちんちん……
な、なんだか……
どんだん膨らんで……
きてるような……
あんっ……♡」

「う、うん……段々……
限界が……近づいて……
きてるみたい……
はぁ……あっ……
くっ……！」

徐々に射精の波が訪れつつあるのか、シエルのふとももに挟まれながらペニスがびくびくと切なそうに脈打つ。

「ま、また……射精……
しそう……なんですか……？」

「うん……だから……
このまま……もう少し……
このまま続けさせて……！」



「はい……♡私も……なんだか……
君の……おちんちんの……
摩擦によって……段々……
アソコが……変な……
感じになって
きました……♡♡」

ペニスによるストローク
だけではなく、
シエル自身も気がつけば
ゆっくりと身体を
前後に動かし、
自ら秘部を擦りつけ、
その感触を堪能していた。

「あっ……うっ……シエルも……
積極的に……身体を
動かしてきて……
ああ……気持ちいいよ……
シエル……」



「ああっ……！そんごんご……」

イキそうっ……！

はあっ……はあっ……

シエル………！」

「んっ……はあっ……はい……

隊長………♡ごうぞ………

遠慮………なく………出して………

ください………♡♡♡」

激しい興奮に身を包まれ、

我慢の限界へと達した

ペニスが射精しようと

シエルの股下でびくびくと

激しく脈動する。

シエルも絶頂を迎えそうな

ペニスを両足のふとももで

ギュッと挟み、

刺激を逃さないよう

ガツ千りと固定する。



「ぐっ……ああっ……
出るっ……！」

びゅるっ！びゅるるるっ！
びゅぐっ！びゅっ！

「んっ……♡
あああっ……♡♡♡♡」

激しい身悶えと共に、
我慢の限界を迎え、
堪えきれなくなった
ペニスから大量の精液が迸る。
快感のあまり、びくびくと
震える身体をシエルが
ぎゅっとう優しく抱きしめ、
しばらくの間、
絶頂のひと時を味わう。





「んっ……ふうっ……」

「はぁぁ……んんっ……♡♡♡」

「た、隊長の……精液……」

「すごい……沢山……♡♡♡」

「出て……あぁっ……♡♡♡」

「シエル……うっ……」

「あっ……くっ……!」

「隊長……♡♡♡」

互いに身体を押し付け合うように密着し、射精の快感に浸る。あまりの快楽に頭が真っ白になりそうな感覚と同時に、互いの身体の温もりだけが感じられていた。

「はあっ……はあっ……ふう……
あっ……隊長の……精液……
ふとももに……
伝って……♡♡」

ひとしきり射精が収まった
ところで、
お互い息を整える。
大量に放出された
精液はシエルの
ふとももにまで伝わっており、
濃度の高いドロドロとした
白濁液が淫猥なまでに
ふとももから滴り落ちていた。
そのふとももに伝わる熱を
シエルは恍惚とした
表情で感じていた。

「はあっ……はあっ……はあ……
シエルのふともも……
柔らかくて……暖かくて……
気持ち……良かったよ……」



「ふふっ、満足…
されたようで…
何よりです…」

「ジヘル…」

「あっ…隊長…」



射精後の余韻に浸りながらも
シエルの身体への愛撫は
止まらない。お尻を優しく
揉みいただき、舌と舌で
淫らに唇を貪り合う。

「んちゅっ……ちゅるっ……

ちゅぷ……んっ……

隊長……♡♡

「ちゅっ……んちゅる……

ちゅぱっ……はぁっ……

シエル……♡♡♡♡

しばらくの間、
唇を貪り合っていたところで
シエルがおもむろに口を開いた。

「あ、あのっ……隊長……」

「ん？どっうしたのっ…シエル…」

シエルが恥ずかしそうに顔を俯かせる。

「そ、その……先程から……外側ばかり……気持ち良く……なっ……いるので……」
「こ、今度は……そのっ……た、隊長の……」
「おちんちん……で……」

うまく言えないといった様子でシエルが口ごもる。しかし、何を言いたかったのか、それはすぐに理解できた。

「いいよ……シエル。今度は……シエルのおまんこでも……気持ち良くなるろう……」

自ら要求したかった事を先に言われ、シエルが恥ずかしそうにしながらも嬉しそうに微笑んだ。

「あ……ありがとうございます……
ごじます……♡♡」

「それじゃあ……シエル、
ちょっとごめんね……」

「だ、隊長……?」

おもむろにシエルの
股下からペニスを引き抜き、
シエルの片足を持ち上げた。



「きゃっ……
あ、あのっ……！た、隊長……っ？」

おもむろにシエルの片足を
持ち上げると、シエルが驚いた
声を上げた。

「驚かせてごめんね、シエル……
このままの……体勢で……
しても……いいかな……？」



「じ、この体勢は……そ、その……
恥ずかしい……でも……」

シエルが恥ずかしそうにしながらも、
ギョッと身体を寄せてしがついてくる。

「ほう……
シエルのお腹に……
勃起したチンポ……
当たってるよ……
シエルの……
おまんこの中に
入りたいって……
びくびくしてるよ……」



「ああ……す、すごい……こんな……
硬く……それに……
とても……熱い……ですね……」

先程射精したのにも
かわらず、
ペニスは未だに
はちきれんばかりに
怒張し、シエルのお腹に
押し当てられていた。
ヤケドしそうな位に
熱く、そして激しく
脈動するペニスの感触に
シエルの膣内は
先程から疼きっぱなしで、
膣口からは
だらだらと愛液が
溢れ出していた。

「ね？だから早く……
シエルの
おまんこの中で……
気持ち良く……
なりたいな……」



「わ、わかりました……
わ、私も……先程から……
その……我慢の……限界で……」

ギョッとしがみついて動こうとしない
シエルの身体は小刻みに震えていた。
身体が快楽を欲して辛抱たまらない
といった様子だった。

「わかった……それじゃあ……
ゆっくりい……入れるね……」

「はい……♡」

ゆっくりと腰を下げ、
ペニスを移動させる。

亀頭の先でシエルのお腹をなぞり、
そのまま下腹部の方へ向かい、
シエルの膣口へと亀頭をあてがう。

「あっ……♡♡」

亀頭を少し当てただけでシエルの
秘部は外側のヒダが物欲しそうに
ねっとり吸い付くように
絡みつき、まるで膣内へとペニスを
誘っている様だった。

「ああっ……すごい……
シエルの……おまんこ……も……
すごく……熱く……
なってる……ね……」

「はあ……はあ……隊長……
じ、焦らさないで……
ください……♡」

「ごめんね……シエル……
それじゃあ……入れてくみ……」

「ああ……♡♡♡」

器用に腰を使い、ペニスの先でシエルの
膣口へと狙いを定めると、ゆっくり前へ
押し進む。先の愛撫で完全に蕩け切った
シエルの肉壺はいともたやすくペニスの
侵入を許していった。

「んっ……♡あああ……♡♡♡♡」

膣内への侵入が感じられるとシエルが甘い嬌声を上げた。ペニスの先でヒダを一枚一枚ゆっくりと掻き分けて進んでいくと真っ先にヒダが竿全体を包み込むように絡みついてきた。

「くっ……ああっ……！す、すばい……シエルの……おまんこの……中……ねっ……といと……いやらし……く……絡みついて……あぐっ……うっ……」

「ああ……♡♡隊長の……
おちんちんが……ごんごん……
中に……♡♡♡」

「はあっ……はあっ……ああっ……

シエルっ……！
一気に……イクよっ……！」

やがてペニスの半分以上が
収まったところで、
一気に腰を前に持っていく。
柔らかい臍肉をゴリゴリと
抉る様に掻き分け、
一気に奥へとペニスが突き進む。

「あああああっっっ……♡♡♡♡♡♡」

一気にペニスを奥まで挿入した途端、シエルが激しく身悶えした。これまでに聞いたことが無い程に大きな嬌声を上げ、ビクビクと身体をよじらせた。

「はっ……はっ……はあ……」

た、隊長……ああ……♡♡♡」



「ああ…はあっ…シエル…
もしかして…入れただけで…
イっちゃった…?」

「あっ…はあっ…はあ…
は、はいい…♡♡」

激しく息を乱し、かろうじて返答する
シエル。未だに身体は快樂の余韻に
包まれている様で、びくびくと身体を
震えさせ、ぎゅっとしがみついで
離れなかった。

「すみません……隊長……
も、もう少しだけ……
待ってて……もらえ……ますか……?」

「うん……いいよ、シエル……
ゆっくり……堪能しよう……」

シエルの膣内は今もなお
力強くペニスを締め付けていて、
周りのヒダが切なさそうに絡みついて
離さないといった様子だった。
その膣内の感触や、
ぎゅっとしがみついで
離れようとしないシエルが
非常に愛おしく思え、優しく、
そして力強く、シエルの身体を支える。

「はあ……はあ……す、すみません……
隊長………」

「少しは落ち着いた？シエル………」

「は、はい……おかげさまで………」

シエルが優しく微笑んで見せた。
長い絶頂から解き放たれ、
シエルの身体からはすっかり震えが
収まっていた。膣内も今は落ち着きを
取り戻し、ペニスを優しく
包み込んでいた。

落ち着きを
取り戻したところで、
ピストンを開始する。
ゆっくりと腰を引き、
カリでヒダを
刺激すると途端に
シエルが甘い嬌声を
漏らし、膣内を
キュッと締め付ける。
落ち着いた今もなお、
感覚は鋭敏になって
いるようだった。

「良かった…じゃあ、改めで…
シエル…今度は…
一緒に、気持ち良くなろう…」
「はい…隊長…♡」



浅いところまで腰を
引き戻したところで、
今度は再び奥へと
一気に腰を前に出す。

「ああっ……♡

はぁ……はぁ……んっ……♡♡

「ああ……シエルの……おまんこの……
中……熱くて……蕩けそうだ……
あうっ……くっ……」



「んんっ……♡ああっ……♡♡♡♡♡
はあっ……はあ……」

小さく収縮した膣内を強引に
拡げる様にペニスが押し入る。
根元までみっちり収まると
周りのヒダが再びペニスに絡みつく。

「はあっ……ああっ……ズヒュッ……
おまんこの中……すてじゅ……
心地良くて……幸せな……
気分だよ……はあっ……」

互いに身体を
抱き合いながら
膣内の密着感を
堪能する。
全神経を結合部に
向け、強い繋がりを
感じる事で非常に
満ち足りた
気分になる。
ねっとりとした
ヒダの感触により、
ペニスも順調に
大きさを硬さを増し、
中で激しく
脈動していた。

「はい……私も……
君の……おちんちんで……
刺激されると……とても……幸せな……
気持ちになります……」

「シエル……♡」
「隊長……♡♡♡」



「ああ…隊長の…おちんちん…
中で…どんだん…
膨らんでいって…ますね…♡」

「うん…シエルの…おまんこが…
優しく…マッサージ…
してくれてるからね…
チンポも…どんだん…
大きくっ…なるよ…
あっはあ…」

「ああ…すごい…
びくびくっ…
中で…響いて…
あっ…♡♡」

「ねえシエル…
今度は…
少しづつ…
速く…動くみ…」

「はい…むっ…
隊長…♡
お好きな様に…
動いて下さい…♡♡」

先程よりも速いストロークで腰を動かす。ペニスが前後する度、シエルの肉壺はピチャピチャといやらしい水音を響かせる。瞳内では、先程射精した精液の残りやピストン運動によって分泌された愛液、カウパーが混ざり合い、非常になめらかな睦の移動を促していた。

「はあっ……はあっ……
はあ……ああ……
シエルの……中……すじい……
めるめるして……
気持ちいいのが……
止まらないっ……
うっ……くっ……！」

「だ、隊長の……
おちんちん……
ああっ……中で……
激しく……
動いて……
ああんっ……♡♡
はあっ……！」



激しい刺激に襲われながらも互いを
求める行為は一向に止まず、
無我夢中で快楽を貪り合う。
腰が抜け落ちない様、
身体を強く支えるように
ギュッと密着し、
互いの温もりを一身に感じ合う。

「ああ……隊長の……
おちんちん……
すごく……
熱くて……中……
ヤケドしそう……
です……♡♡♡」

「はぁっ……ああ……
シエルの……
おまんこだあって……
すごく……中……
熱くて……チンポ……
溶けそう……だよ……
ううっ……あっ……」



「はっ…はっ…はあっ…ああっ…
シエル…シエルっ…!!」

「あ？…はあっ…
た、隊長…
は、激し…んああっ…!!
です…ああっ…
ああっ…!!」

ペニスが蕩けそうな
感覚を思わせる位に
シエルの膣内は熱く、
その熱にあてられ
気持ちまでもが
昂ぶり、ピストンの
速度は激しさを
増す一方だった。

「ごめんっ…
シエル…
腰…うっ…
止まらないっ…!!」

「ああっ…
ぞ、そんなあ…
あんっ…!!」



「だ、隊長……も……も……し……か……つ……
射精……し……ぞう……
なんですか……？」

「は……あ……は……あ……
流石シエル……うん……かない……
限界が……あ……あ……近づいて……
きている……みたい……く……く……」

全身に襲いかかる
快楽に対し、
歯を食いしばり
ながら必死に堪え、
腰を動かし
シエルの肉ヒダを
搔き分けていく。
その膈内では
はやく射精したいと
ばかりにペニスが
びくびくと切なく
脈動し、暴れまわる。



「いいですよ……♡
君の……好きな……時に……
あっ……♡存分に……射精……
してください……♡♡♡♡」

「ああ……シエルっ……！」

「あんっ……はあ……
隊長……♡♡♡♡」

シエルが耳元で、
甘く射精を促し、
自らも身体を
動かしてペニスへと
刺激を送っていく。
膣内ではうねるような
動きでヒダが
ペニスに絡みつき、
射精へと導いて
いくかのよう
全体を締め付けてくる。
その状況に、
段々とペニスも
はちきれんばかりに
怒張し、一層硬さを
増していく。

「はっはい……
んっ……
あああっ……♡♡♡♡」

力強く腰を打ち付け、
シエルの膣内を激しく
搔き乱す。シエルも
段々と限界が
近づきつつあるのか、
膣内がキツく収縮され、
ペニスを一身に
感じようと懸命に
絡みついてくる。
力強さが増した
膣の圧迫感は柔らかい
弾力と共にコリコリ
とした感触が加わり、
力りの部分で擦る度、
強い快感が全身に
駆け巡ってきた。

「ああっ……♡♡すごい……
おちんちん……ごんごん……
硬く……なっ……
あああっ……♡♡♡♡」
「はあっ……シエル……
ラストスパート……いくよっ……
ああっ……このまま……
射精まで……腰……動かす……
から……ああっ……!!」



「ああっシエル……！イキそう……んぐっ……あああっ……！！」

「はいっ……隊長……わ、私も……い、一緒に……んっ……」

「あああっ……♡♡♡」

互いに限界を迎え、
激しい身悶えと共に、
シエルの膣が一気に収縮され、
ペニスを圧迫する。
その拍子にペニスも激しく
脈動すると同時に大量の精液を
膣内へと放出する。

「ああっ……すごい……中に……」

沢山……ああ……注がれて……」

あんっ……♡♡♡」

「ああっ……シエルの……」

おまんこ……暖かくて……」

射精……止まんないっ……」

んぐっ……はあっ……」

これまでと同じか、それ以上にも
思える様な大量の精液がシエルの
膈内を満たしていく。
それどころか収まりきらない
精液が逆流して結合部から
勢いよく迸る。

「はあっはあっ……ああ……

シエル……♡♡♡」

「はあっ……ああ……

隊長……♡♡♡」

どくどくと一向に溢れ出る精液を一身に受け止めるシエル。身体はすっかりと快楽の虜となり、ふるふると小さく震わせていた。その身体を優しくぎゅっと抱きかかえ、ペニスを根元までみっちりとしエルの肉壺に収め、射精が収まるのをただただじっと待っていた。

やがて長い射精が終わり、互いに息を切らしながらゆっくりと落ち着きを取り戻していく。すっかり快楽の虜となった身体は未だに小さく身震いしていて、興奮が収まるまでには今しばらく時間がかかりそうだった。結合部からは膣内を逆流し、溢れ出た精液が濃い塊を運び、滴り落ちていた。

「はぁ…んっ…はぁ…
君の…精液…
とても…暖かい…
ですわ…♡♡」

「はぁ…あっ…
ふう…シエルの
おまんこの中も…
精液で…
一杯で…
すぐ…
暖かいよ…
なんだか…
今までで…
一番…多く出た…
はぁっ…
気がするよ…」

「ああ…シエルの…
おまんこの…中…
ねっとりと…
絡みついてきて…
はあっ…あっ…
すごく…
気持ちいいよ…」

結合部の温もりを感じ、
恍惚とした表情を浮かべるシエル。
瞳内では収縮したヒダが優しく
ペニスに絡みつき、
萎縮し始めたペニスの感触を
ねっとりと味わうかのよう
に押さえ込んでいた。

「ふふっ…そうですね…
沢山…注いで…
もらいました…♡♡」

しなしながら萎縮しきったペニスは自然とシエルの膣口からゆるりと抜け落ち、先程までペニスが収まっていた膣口からは大量の精液が溢れ出してきた。

「あっ……♡♡♡♡」

ペニスが抜け落ちた拍子にシエルがビクッと身体を小さく震わせた。

「おちんちん……
抜けちゃいましたね……♡」

「うん……流石に……
これだけ出した
後だと……
勃って……いるのも……
難しいかな……」



「あ、あの……隊長……」

「ぶっつけたの……んんんんんん」

「その……もし……よろしいければ……
最後に、私から……君に……
ご奉仕、させてもらっても……
いいですか……?」

「えっんんんんんん……んんんんんん……」

「はい……♡」

シエル自らの
申し出に驚くと同時に、
身体の奥底で再び興奮が
湧き上がるのを感じられた。



一先ず身体に
まとわりついた
体液などを再び
洗い流した後に、
シエルが目の前で
おもむろに
膝をついた。

「わかった……それじゃあ、
お言葉に甘えて……
よろしくね、シエル……♡」

「はい、お任せ下さい……
隊長……♡♡」



「それでは失礼します。隊長……♡」

「うん……」

激しい情事の後、
互いに息を整え、
落ち着きを
取り戻したところで、
シエルが最後の
奉仕と打って出た。



「激しい行為が続いて…お疲れだと思っので…
最後は…その、ゆっくりと…私の、胸で…
君の…おちんちんを……気持ち良くさせて…
もらいますね…♡」

「ジヒム…♡」

そう言ってシエルは
おもむろに萎縮した
ペニスを両方の
豊満な乳房で
すくい上げ、
挟み込んできた。



「ああ…あっ…うっ…シエル…はあっ…」

「んっ…ふう…はあ…お加減は、
いかがですか…？隊長…♡」

「う、うん…すごい…
シエルのおっぱい…
柔らかくて…あったかくて…
すごく、気持ちいいよ…」

これまでのシエルの
膣内やふともも、
手といったあらゆる
部位での感触とは
全く異なり、唯一無二の
感触がペニスを優しく
包み込んでいた。
想像を絶する感触に
萎縮しきったペニスも
反射的に小さく
反応を見せる。

「あっ……♡おちんちん……びびびび……
少し、反応しましたね……♡」

「これだけ気持ちいいと、反射的に…
反応、しちゃうよ……」

疲れ果てていたと
思われるペニスは
徐々にシエルの胸の中で、
どくどくと脈打ち出し、
次第にみるみる大きさを
取り戻していった。

「あっ……おっ……♡な、なんだか……むんむん、大きくなっ……♡」

ペニスの脈動にシエルも思わず反応し、小さく身体を震わせる。段々と大きくなっていく様子を胸の中で感じ取り、それに応じてシエル自身も自然と興奮が高まっていく。

「はあっ……はあ……
ああ、すごい……
挟まれて……
ただけなのに……
なんだか……
どんだん……
興奮して……
千ンポ、大きく
なってくるよ……」

シエルの豊満な乳房はしっとり濡れていて、それでいてきめ細かく、ペニスが肌に触れると吸い付く様な感覚があった。

「ああ……た、隊長の、おちんちん……みるみる…
硬く、大きくなって……はあっ……♡♡」

シエルの乳房に挟まれていたペニスは
すっかり元の大きさや硬さを
取り戻しており、ドクドクと静かに
鼓動を打っていた。

「はあ……シエルの…
おっぱいの中で、すっかり…
大きくなっちゃったね……」

「まだ…動かしてもいけないのに……
そ、そんなに、よろしかったでしょぅうか……？」

「うん…シエルのエッチなおっぱいで
挟まれているだけで…
すごく、興奮したよ……」

「そ、そんな……隊長……♡」

素直な感想にシエルが
恥ずかしそうに照れる。
しかしながら
恥ずかしそうに
しながらも無意識に
両方の乳房はペニスを
優しく包み込むように、
ぎゅっと寄せられていた。

少しの間、ペニスの熱にあぐらられ恍惚としていた
シエルだったが、ハッと我に返るように奉仕を再開する。

「そ、それでは……少しづつづつ、
動かして……いきますね……」

「うん……おんじゅ、シエル……」

「はい……お任せ下さい……♡」

「んっ……はぁ……ふう……
ふふっ、君のおちんちん……
すっかり……大きく
なれましたね……♡
それに……すごく、
ヤケドしそうな位に……
熱く、なってます……♡♡」

シエルの乳房の間に
挟み込まれたペニスは、
はちきれんばかりに
大きく怒張し、
今もなお脈打ち続け、
高い熱を保っていた。
そんなペニスの
感触を乳房を通して
感じるシエルも
すっかりと紅潮し、
興奮しきっている
様子だった。

「うう……シエルの、
おっぱいの中も……すっく……
暖かくて、気持ちいいよ……はぁ……」

「ふふっ、中で、ぐんぐんぐんぐん…
鼓動を感じます……♡」

シエルがさらに
乳房を寄せて、
ペニスを圧迫する。
なめらかな
肌の感触にペニスが
吸い寄せられる
ような感覚を
覚えると同時に、
非常に心地の良い
気分が生まれる。
龟头からは
勃起した時点で
だらだらとカウパーが
溢れ出し、シエルの乳房に
まで伝わっていた。

「ああっ……すごい……はあっ……
シエルのおっぱいに……キンポ、
埋まって……ああっ……」

「ふふっ、君の切なそうな顔…
可愛いですよ…♡
こういうのは…んっ、
いかがですか…?」

顔色を伺いながら、
シエルが今度は両側から
乳房を押し付ける様に
挟み上げてきた。

「あああっ……
んぐっ……ああっ……!
はあっ……
シエル……
ああ……」

両側から挟み上げられた事により、
勃起したペニスはすっかり
乳房の中に収まってしまった。

「んっ……あっ……♡
すっかり……胸の中に、
収まってしまうましたね……
んっ……♡」

「はあっ……はあっ……
ああ……すごい……
シエルの、おっぱい……
さっきから……感じて、
ばかりだよ……はあ……」

乳房による愛撫で
すっかりペニスは
骨抜きにされ、
中に埋まっっている
今もなお、切なそうに
激しく脈打ち続けていた。
そんな様子にシエルは
愛おしさを感じながらも、
反応を楽しんでいる様子だった。

しかしながらペニスも
負けじと大きく脈打ち、
乳房の快感に
抵抗してみせる。
その反応にシエルも
思わず驚き、
また同時に乳房に
強い刺激が
伝わるのを感じ、
ほんのわずかに
身悶えさせた。

「あっ……♡はあっ……
た、隊長の……おちんちん……
な、中で……大きく、跳ねて
んっ……ああっ……♡」

「はあっ……ああ……シエルも、おっぱいで……
感じてきてる……みたいだね……はあ……」

「そ、そうなのでしょうか…？
な、なんだか…胸を通して
びりびりと…痺れる様な、
感覚が…ああっ……♡♡」

「それはきつと…シエルの
胸も、チンポによって…
気持ち良く、なってる
からだよ…あぁ……」

「そ、そんな
こちらの方から…
気持ち良くしていただとばかり、
思っていたのですが…
はぁっ…んっ♡」

「シエルのおっぱいも…
おまんこと一緒にで、
性器って事だね……♡」

「そ、それは……
よ、よくわかりませんっ……♡
君の言ってる事……
なんだか滅茶苦茶です……♡」

「シエルが恥ずかしそうに又囁く。お。」

「そんな事言っても……
シエルもおっぱいで感じてるよね……っ？」

「もう……君は……いじわるです……
そんな、いちじらしい事を……言っ……」

「でも……はあっ……
気持ちいいでしょ……？
俺はシエルの……
おっぱいまんこで……
もっと、気持ち良くなりたいな……」

「っ……隊長……」

「ねっ……だから、
シエルのおっぱいまんこで……
チンポ……捕食……して……」



劣情を掻き立てられる様な言葉責めに、
シエルの身体が疼き出す。
我慢も限界にきているようで、
欲望の赴くまま、奉仕を再開する。

「わ、わかりました……
君の、いやらしい……
おちんちんは、
私の胸で……捕食、
します……♡♡」

「回繳ごめ……ンヒニ……♡」

「っ……♡茶化さないでください……♡」

再び奉仕を再開し、シエルが乳房でペニスを挟み込む。豊満な乳房の温もりにペニスはますます大きくなる一方で、激しく脈動する。

「あぁっ……んっ……
はぁ……む、胸の中で……
おちんちん……
暴れて……
あんっ……♡♡」

「あぁっ……はぁ……
いいよ、シエル……
そのまま、続けて……」

「はぁ……はぁ……はい……♡」

「はあ……はあ……隊長……
き、気持ちいいですか……？」

「うん……すごく、
気持ちいいよ……
あうっ……くっ……はあ……
シエルのおっぱいの中で、
チンポ……蕩けそうだ……」

乳房でペニスを完全に
包み込む。中のペニスの
大きさや硬さにシエルも
すっかり恍惚とし、
その熱を乳房を圧迫させて
熱心に感じようとする。

「シエルもおっぱい、気持ちいい……？」



「んっ……はあ……はい、なんだか……
胸、だけじゃなく……段々……
身体中が、変な……気分、です……♡♡♡」

「それじゃあ、
もっともっと……
気持ち良く、なろうっ……
シエル……」

「ああ……隊長……♡♡♡」

胸を寄せ上げ、ペニスをしごく
ストロークも次第に速くなり、
より一層強い刺激がペニスに加えられる。

「はあっ…はっ…ああ…
シエル、それっ、
すっごい…気持ちいい…
ああっ…もっと、
もっとしごいて…
ああ…」

「はあっ…はあっ…
こ、こう…ですか…
隊長…♡」

ぬちゅっ…ちゅっ…ぬちゅっ…
ぬちゅっ…

献身的な乳房の愛撫により、先程からカウパーの分泌が止まず、
乳房が上下に擦れ合う度、淫猥な水音を響かせていた。

「あぁっ……シエルのおっぱい……くっ……
うう、チンポに吸い付いて……
気持ちいいっ……!!」

「あっ……♡♡
隊長の、おちんちん……
中で、とんとん……
熱く、なっ……
はぁ……♡♡♡♡」

「あぁ……
シエル、シエル……
はぁっ……」

「だ、隊長……♡♡♡♡」

ペニスと乳房の交わりを通じて互いの熱を
ダイレクトに感じ、次第に興奮も順調に高まっていく。
また、ペニスのゴリゴリとした感触が乳房の中で擦れる度、
シエルの身体中に強烈な快楽が駆け巡ると同時に、
胸の先が熱くなる感覚を覚える。

「はぁ……ああ……君の、おちんちん……
中で、昂ぶっているのが……あっ♡
すだく……感じます……♡♡♡」

「はぁっ……あっ……
シエルの、おっぱいの中……
気持ちよすぎ……
興奮が、収まらないよ……
はぁっ……」

互いに湧き上がる興奮を抑えきれず、
徐々に息も荒くなっていく。

「はぁ……はぁ……あっ……隊員……♡♡」

「はぁっ……はぁっ……あぁっ……
シエル……！」



互いに見つめ合いながら、ひたすら行為に没頭する。
息を荒くしながらも、シエルは健気にこちらの反応を伺いながら、
ペニスへと献身的な奉仕を続ける。柔らかく、きめ細かい乳房は
ゆっくりとペニス全体を包み込み、もっちりとした感触が
優しくペニスを刺激する。

「ああ……シエルのおっぱいまんこ……
千んポ、捕食……されてる……
気持ちよすぎて、頭が……どうにか、
ないそう……っああ……!」

「はあ……はあ……あっ……
はあ……♡
ふふっ、君は本当に……
気持ちよさそうな……
表情をしますね……♡♡」

「な、なんだか……
恥ずかしいな……
ああっ……はあっ……」

ただじっと、互いに顔を背けることなく、相手だけを見つめ、
その身に快樂を受け入れていく。気持ちよさそうにしている
様子を眺めるシエルも、ペニスを愛撫しながら時折
身体をよじらせ、感じる素振りを見せていた。

やがて次第に限界が近づきつつあるのか、ペニスだけではなく、身体全体もびくびくと小さく震えだしてくる。ペニスの方も先程から、シエルの乳房で挟まれながらドクドクと大きく脈打ち、絶頂を堪えている様子だった。

「隊長……なんだか、苦しそう……
ですわ……射精……
しそうですか……？」

「う、うん……まだまだ、
堪能していたけど……
くっ……！なんだか……少し、
ムズムズしてきたよ……
はぁ……」

「すごい……びっぴっ、震えてますね……♡
遠慮せずに……出したい時に、出して……
くださいね……♡♡」

そう言ってシエルはゆっくりと優しく
乳房を寄せてきた。しっとりとした
乳房の心地良い温もりが更なる興奮を
高めると同時に、激しく脈打つペニスを
なだめるように柔肌でそっと包み込む。

「ああ……この、
優しい感触……
シエルのおっぱいは……
本当に、
気持ちいいね……♡」

「んっ……♡
なんだか……
照れくさいです……♡♡♡」

穏やかな動作に思わず恍惚としてしまう。
それほどまでにシエルの乳房は心地良く、
幸福感に満ちたものだった。

しかしながら安らかなひと時もそう長くは続かず、
段々と射精感がこみ上げてきたペニスがシエルの
乳房の中で再び激しく脈動し始めた。

「あっ……♡す、すっぴん……
はあ……激しく……響く……
はあ……」

「ああ……はあ……シエル……
そろそろ……限界、
かもっ……あぐっ……
うっ……」



「んっ…あっ…はあ…
それじゃあ、段々…速く、
動かしていきますね…♡♡」

「はあ…はあ…
うん、お願い…♡」

最後の追い上げと
言わんばかりに
シエルが乳房で
ペニスを擦り上げていく。
しっとりとした柔肌の
ストロークにペニスを
通じて全身に電流の様な
快感が迸る。



「はあっ……はあっ……はっ……
ああっ……！シエルっ……！」

「はあ……あっ……♡
すごいです……♡♡
隊長の……おちんちん……
どんどん、大きく……硬く……
んっ……なっ……って……
はあ……♡♡♡」

胸の間に擦れる度に
淫猥な水音を響かせ、
シエルが次々に
ペニスへと刺激を送る。
乳房のもっちりとした
感触がペニス全体に
絡みつく度、
腰が抜け落ちそうな
感覚と同時に
大きく身体が震えだす。

「ああっ……！はあっ……はっ……
シエル……気持ちいいよ……
シエルっ……うっうっ……」

とめどなく溢れる快楽に
先程から情けない声ばかり
が漏れ、順調に限界へと
向かっていく。昂る感情に
あてられたシエルも
激しい興奮を頭にし、
息を荒くしながらも
ペニスへの奉仕を
続けていく。

「んんっ……♡はあっ……
隊長……♡♡
隊長の……興奮に
あてられて……なんだか
私も、先程から……
変な、気分……です♡♡♡」

「はあっ……ああっ……！くっ……！
シエルっ……！」

「ああっ……♡♡♡
はあ……はあ……
隊長の……おちんちん……
どんどん、膨らんで……
あっ……♡♡♡」

「**圧迫された乳房の中で、
ペニスが大きく脈動する。
その鼓動に思わずシエルも
軽く身悶えさせ、
全身に快楽を行き渡らせる。**」

「はあっ……はあっ……ああっ……！」

シエルっ……！そろそろ……

くう、うっ……！

射精っ……しろう……

あああっ……！」

「はあ……あっ……

隊長……♡ご、むづむづ……

はあ……おもいっきり……

射精……はあ……

してください……

あっ……♡♡」

「ああっ……シエルっ……」

「はあっ……あっ……

隊長……♡♡」



「んくっ…ああっ…
出るっ…!!」

びゅびゅっ!びゅるるっ!
びゅっ!びゅるっ!

「んんっ
あっ」

絶頂に達した途端、激しい快楽が身を包み、大きく身体を揺わせると同時に亀頭から大量の精液が迸る。勢いよく飛び出した様子にシエルも驚きと同時にびくびくと身悶えし、射精の勢いを全身で感じていた。

「ああ……すごい……
まだ、こんなに……
沢山、出るなんて……
はぁぁ……♡♡♡」

「はぁっ……ああ……
シエル……ああ……
くっ……!」

これまでも沢山射精したにもかかわらず、
勢いよく放出された精液は相変わらず
ゼリー状の様な塊を帯び、非常に濃度の高い状態を保っていた。

やがてひとしきり射精が収まると、互いに息を整えつつも、あちこちに飛び散った精液を見つめながら射精後の余韻に浸っていた。

「はあ……はあ……
はあ……ああ……
シエル……」

「はあ……はあ……隊長……
はあ……ああ……すごい……
こんなに、沢山……はあ……♡♡♡」

胸の周りを伝う精液の熱を感じ、シエルが恍惚とした表情を見せる。勢いよく放出された精液はシエルの胸や顔、それに髪にまで至り、シエルを汚していた。

「はぁ……ごめんね、シエル……
こんなに、出るとは……
思わなかったから……
髪の毛とかにも、
かかっちゃって……」

申し訳なさそうに謝ると
シエルが優しく微笑んだ。

「ふふっ、
気にしないでください……
隊長……洗えば落ちますから……
それよりも……本当に、
すごい量でしたわ……♡♡♡」

「うん……これも、シエルのおっぱいが……
気持ちよかったおかげだね……♡」

「ご満足…頂けた様で、
なにようです…♡♡♡♡」

「本当に気持ちよかったよ。
ありがとう、シエル…♡♡♡」

快楽の余韻に浸りながらその場で密着し、互いの熱を感じ合う。
未だにシエルの乳房に挟まれたままのペニスはすっかり
興奮も収まり、徐々に元の大きさに戻りつつあった。

「はぁ……はぁ……とりあえず……今夜はもう、これで……打ち止め……かな……」

「お疲れ様でした、隊長……♡♡♡
ちゃんと、出し切りしましたか……?」

「うん……おかげさまで……
シエルの身体で、いっぱい……
気持ち良くなれたよ……♡」

「私も……君のおかげで……いっぱい、
幸せな……気分になりました……♡♡」





「あらがやいっ………(ワキ)にもち………羞恥………♡♡♡♡」

「ふんふん………」

話しているうちに興奮が収まったのか、シエルの乳房に挟まれていたペニスがすっきり萎縮し、ぬるりと抜け落ちてしまう。乳房の間からは大量に放出された精液がシエルの身体を伝い滴っており、淫猥な様相を醸し出していた。

「あ……」

「あ……♡♡」





「ふふっ、おちんちん……
抜けちゃいましたね……」❤️

「ははっ、すっかり
縮こまっちゃったね……」

「沢山……注いで、もらいましたからね……♡
君の精液の温もり、まだ身体中に……♡
残っています……♡♡」

シエルがうっとりとした表情で
身体中にまとわりついた精液を
眺める。


「そうだね……でも俺も、
シエルには……沢山、
気持ち良くして
もらったからね……♡
とりあえず、身体
冷えるといけないし……
早いとこ、
洗い流しちゃおうか」

「はい、隊長……♡」





こっぴどしてシエルによる最後の奉仕も終え、
再び身体を綺麗に洗い流した後、浴室をあとしする。




濃密な情事を終えた後、互いに程良い眠気や疲労感に包まれながら床に就く。裸のまま横になり、見つめ合いながら少しの間、会話を交わす。



「今日は本当に……お疲れ様でした、
隊長……♡」

「うん、シエルの方もお疲れ様」



「その……とても、充実した……
時間を過ごせました……本当に、
ありがとうございます……」

「こちらこそ、シエル……
俺も、シエルと一緒に
過ごせたから……沢山、
リラックスできたよ……」



「……ふふっ、なんだか……
照れくさいです……♡」

シエルが恥ずかしそうに微笑む。



「こうしてシエルと二人きりで……
肌を重ねて……
すごく、幸せだよ……」

「隊長……♡」

「私の方こそ……君と……
交わる事によって……とても、
幸せな気持ちで一杯です……」

互いに幸せに満ちた
気持ちを吐露する。



「なんだか思い出したただけでまた、興奮してきちゃうな……」

「そんな……♡
あれほど沢山
射精されたのに……
出し切ったはずでは
なかったのですか……」

「ははっ、そうなんだけどね……
でもシエルとは、何回でも
できちゃうというか……」

「もう……いやらしいです、
隊長……♡」

「ズバリ、シエルの身体が
エッチなのが悪い！」

「またそんな
いじわるを
言って……♡♡」





「それに……最後にシエルから
してくれたのなんて、すごく……
嬉しかったよ……♡」

「た、隊長……♡
なんだか、面と向かって
言われると……その、
恥ずかしいですね……♡」

「シエルのおっぱい、
最高だったよ……♡」



「恥ずかしいです……隊長……♡♡」

「可愛いよ……シエル……♡」

ストリートな気持ちを
ぶつけられ、
恥ずかしそうな
素振りを見せつつも、
シエルは嬉しそうな
様子だった。



「あの……隊長……」

「むいっただの〜んHみゅ〜」



「いつもありがとうございます……
また、お願いしても……
いいですか……?」

「ジヒム……」



「もちろん、大歓迎だよ……♡
また、こうして一緒に……
気持ち良くなろう、シエル……」

「隊長……♡
ありがとうございます……♡」



「あひね……響つてくちね……♡」



「や、そろそろ寝ようか」

「はい……♡」

徐々に眠気も
限界にきているのか、
まぶたが重くなるのを
感じ、腰の辺りまで
掛けていた布団を
おもむろに肩の方まで
持ってくる。



「寒くない？ジヘル？」

「はい、大丈夫です……」



「隊長……」

「ん……？」



「……もう少し、
近くに行ってもいいですか……?」

「うん、いいよ。
おいで、シエル……」



「ふふっ、さっっても……
暖かいですね……♡♡♡」

「うん……シエルの温もりも
十分伝わっていくるよ……♡♡♡」



「おやすみ、ムヒムヒ……」

「おやすみなさい、隊長……」



幸せな時間を経て、やがて深い眠りへと就く。
明日もまた、厳しい戦いが待ち受けているが、
希望を信じてゆっくりとまぶたを閉じる。

「隊長、大好きです……♡」